

京都大学	博士(文学)	氏名	張東翼
論文題目	モンゴル帝国時代の北東アジア三国 — 多元的交渉と交流の研究 —		
(論文内容の要旨) 本論文は、序章をはじめ第一部・第二部・第三部・終章・附録の六つの部分からなる。 序章 研究の対象と動向 第一部 モンゴル・高麗・日本に関連する新しい古文書資料 第一章 一二六九年「大蒙古国」中書省牒と日本側の対応 第二章 一三六六年高麗国の征東行中書省の咨文に対する検討 第二部 高麗人と元の文人との交遊 第一章 新資料を通じてみた忠宣王の元での活動 第二章 李齊賢および権漢功、そして朱徳潤 第三部 日本遠征の指揮官：金方慶と洪茶丘、そして戦争以後の麗日関係 第一章 金方慶の生涯と行蹟 第二章 モンゴルに投降した洪福源および茶丘の父子 第三章 十四世紀の高麗と日本の接触・交流 終章 今後の課題 附録 第一章 京都大学所蔵の開仙寺址石燈記の拓本 第二章 一五七五年日本使節団にかかわる古文書資料の検討 第三章 京都大学所蔵にかかる韓国古典籍資料の整理と解題 まず序章では、研究の対象と目的、および従来の主要な動向を整理する。ついで、第一部では、京都大学文学研究科の日本史学が蔵する江戸時代編纂の『異国出契』にもとづき、日本へのモンゴル襲来（いわゆる元寇）に先行して一二六九年にイエケ・モンゴル・ウルス（漢訳は「大蒙古国」）の最高行政官庁たる中書省から日本国王（天皇）あてに発出された牒文を検討する。この牒文の紹介は、日本の東洋史・日本史の関連研究者に衝撃と影響を与え、本論文全体のなかでも白眉というべきものである。同第二章では、それからおよそ百年後の一三六六年、高麗国に設置されていた征東行中書省より日本へ送られた咨文の復元と検討をおこなう。醍醐寺宝聚院に蔵されるこの文書については、かつて黒板勝美や中村栄孝らが研究したが、原文書の一部に磨滅・欠損があり、十分な接近をはかりがたかった。これを補完するものとして別の新資料を発見し、それにもとづき咨文の全体を再構成しつつ、内容を具体的に分析する。日本にとっては南北朝の末期、足利義満による権力再編が序々にすすみつつあるなかで			

の、高麗王朝治下・韓半島との交渉を示す貴重な労作といえるだろう。

次に、第二部では一転して、モンゴル皇帝クビライの外孫としてモンゴルと高麗のはざまに生きた忠宣王・王璋の活動を中心に叙述する。すなわち、第一章では韓国側の文献史料にとどまらず、中国・日本に蔵される関係データを収集・整理し、政治・文化など忠宣王の多面にわたる活動に照明をあてる。ついで第二章では、忠宣王に随従したふたりの高麗人、李齊賢と権漢功に焦点をあて、モンゴル治下の著名な文人のひとりで江南人たる朱徳潤との交流の様子を活写し、韓半島における中国文化の受容に言及する。

さらに、第三部ではその第一章において、二度の日本へのモンゴル襲来のさい高麗国軍の主将となったことで名高い金方慶について、軍事方面のみならず彼の生涯の全般にわたって様々に検討を加える。ついで第二章では、高麗国の“裏切り者”としてモンゴルに直属し、いわば金方慶と対極の立場にあった洪福源と洪茶丘の父子をとりあげ、洪氏一族の複雑な軌跡を描くとともに、歴史上の評価に踏み込む。そして、第三章では十四世紀における高麗・日本関係史を倭寇問題などを折り込みつつ総述する。

最後に総括として、終章にて全体を見渡しつつ、モンゴル時代の北東アジア三国の交流史研究の今後について提言をおこなう。なお、三章にわたる附録にて、本編とは別箇の意味をもつ論述がなされていることを附記する。

(論文審査の結果の要旨)

慶北大学教授・張東翼氏は、高麗・宋・遼・金からモンゴル時代にわたる各種の歴史データを蒐集・整理した数冊の浩瀚な根本史料集をはじめ、当該時代史について韓国を代表するトップランナーの歴史研究者として、広く内外にその名が知られている。このたび、京都大学文学研究科に提出した博士論文は、長年にわたる重厚な史料探訪を踏まえ、モンゴル世界帝国の出現という歴史の大転換期にあたって、日中韓の三国がいかにかわり、かつは北東アジアの歴史が変転していったかについて、とくに韓半島に分析視角の中心をすえつつ大きな歴史構図を描こうとしたものである。

まず序章にて、研究の対象と目的、および従来の主要な動向を述べたうえで、本論を三部に分けて展開する。第一部第一章では、京都大学文学研究科の日本史学が蔵する江戸時代集成の外交文書集『異国出契』にもとづき、日本へのモンゴル襲来（いわゆる元寇）に先行して一二六九年にイエケ・モンゴル・ウルス（漢訳は「大蒙古国」）の最高中央官庁たる中書省から日本国王（天皇）あてに発出された牒文を検討する。この牒文の紹介は、日本の東洋史・日本史などの関連研究者にある種の衝撃とともに影響と波及効果を与え、本論文全体のなかでも白眉というべきものである。同第二章では、それからおよそ百年後の一三六六年、高麗国に設置されていた征東行中書省より日本国へ送られた行政文書たる「咨文」の復元と検討をおこなう。醍醐寺宝聚院に蔵されるこの文書については、かつて黑板勝美や中村栄孝らが分析をこころみだが、原文書のかなりな部分に欠損があり、十分な接近をはかりえなかった。張氏はこれを補完するものとして別の資料を発見し、それをもとに本来あるべき姿の「咨文」を再構成しつつ、内容を具体的に分析する。一部にややツメの甘さがのこるものの、日本にとっては南北朝の末期、足利義満をいただく権力再編が徐々にすすみつつあるなかでの、高麗王朝治下・韓半島との交渉を示すものであり、日韓交流史の一齣として貴重な労作といえるだろう。

次に、第二部では一転して、モンゴル皇帝クビライの外孫として生を享け、モンゴルと高麗のはざまに生きた独特の人物、忠宣王・王璋の複雑多岐な活動を中心に叙述する。すなわち、第一章では、韓国側の文献資料にとどまらず、中国・日本に蔵される漢文データを収集・整理し、政治・文化をはじめ陰翳に満ちた忠宣王の活動について、多面にわたって照明をあてる。ついで第二章では、忠宣王に随従してモンゴル政権下に赴いたふたりの高麗人、李齊賢と権漢功をとりあげ、モンゴル治下の著名な文化人のひとりで江南人であった朱德潤との交遊・交流の様子を活写するとともに、それらにかかわる一連の事柄を通じて韓半島における中国文化の受容にも言及をこころみる。なお、第二部全体の記述は十分に意味もあり、また新しい研究視角への挑戦でもあるが、そのいっぽう率直にいつて当時のモンゴル帝国の状況や政局の変転については、漢文資料のみで把握するのはもともと無理があり、随所に破綻をきたしていることは否めない。また、モンゴル帝国治下の文化人・文化活動については、すでに日

本・中国・台湾・欧米において、かなりな質量の蓄積があり、“韓半島からのヴィスタ”はそれなりに了解できるものの、必ずしも事柄の全体を周到に見渡したうえでの十全なものとはなりきっていないように見える。

さらに、第三部ではその第一章において、二度の日本へのモンゴル襲来の際、高麗国軍の主将となったことで名高い金方慶について、軍事面のみならず彼の生涯の全般にわたって様々な分析・検討をくわえ、読みごたえのある歴史叙述となっている。ついで第二章では、高麗国の“裏切り者”としてモンゴルに直属し、いわば金方慶とは対極の立場にあった洪福源と洪茶丘の父子をとりあげ、洪氏一族の複雑な浮沈の軌跡を描くとともに、従来は悪罵のみ強調されがちであった洪氏集団に再評価の糸口を見つけんとする。そして、第三章では、十四世紀における高麗・日本関係史の展開を、当然のことながら問題となる倭寇とその周辺のありようなども折り込みつつ総述する。また、この時期における仏僧たちの“国境”をこえた動きにも目を配る。

最後に総括として、終章にて全体を見渡しつつ、モンゴル時代の北東アジア三国交流史研究の今後について、幾つかの提言をおこない、そのおおむねは首肯できるものである。なお、附録のかたちで三章にわたって各種資料や文化財に言及するが、本論とはひとまず別箇のものであり、ここではそのことだけを附記するにとどめる。ちなみに、日本国首脳の方々の発言もあり、日本に将来された文化財についていくらか議論があると聞くが、評者が了解する限り一九一〇年の日韓併合以後は別として、主に十三・十四世紀から江戸期にかけて大陸・半島より大量に導入された典籍などは、それぞれその当時において驚くべき高額できちんと購入されたものであり、その手続きや金額についても、しばしば記録が残っていることを明記しておきたい。

以上、審査したところにより本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、二〇一〇年八月二日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。